

<特集「地域医療を考える」>

## 地域医療における小児外科の役割

小 野 滋\*

自治医科大学小児外科

### The Role of Pediatric Surgery in Community Health Care

Shigeru Ono

*Pediatric Surgery, Jichi Medical University*

#### 抄 録

近年の地域医療の抱える問題点を、小児外科という極めて専門性の高い領域から捉え、地域医療における小児外科の存在意義とその果たすべき役割について考察する。

まず、地域における小児医療の完結のために、各医療機関の小児科との連携のみならず、地域住民との連携・協働を構築し、小児外科のアイデンティティを確立する事が大切である。次に各地域の小児診療拠点病院において、小児外科医療の集約化・効率化を図ることで、医師不足を補うとともに、質の高い小児外科医療を提供し、小児医療の充実・発展に寄与することができる。最後に、教育機関において優秀な小児外科医を育てることで、全身管理および外科的処置のできる究極の小児専門医を育成し、地域医療の再建に貢献することが期待できる。

キーワード：地域医療，小児医療，小児外科。

#### Abstract

We attempted to understand recent issues in community health care from the perspective of pediatric surgery, a very highly specialized field, in order to identify the significance of any specific roles that pediatric surgery could play in community health care. First, in order to provide pediatric care within the community, we will not only promote partnerships with the pediatrics departments of various medical institutions but also build collaborations with community members, thereby establishing the identity of pediatric surgery. Next, by offering more intensive and efficient pediatric surgical care through the pediatric department of the hospital mainly responsible for pediatric care in each community, we will try to compensate for the lack of pediatric surgeons, offer high-quality pediatric surgical care, and contribute to the enrichment of pediatric health care. Lastly, by training excellent pediatric surgeons at various educational institutions, we will develop extremely competent specialists in pediatrics who can provide general care and surgical treatment as they contribute to the reconstruction of community health care.

**Key Words:** Pediatric surgery, Community health care, Pediatric health care.

---

平成26年11月10日受付

\*連絡先 小野 滋 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺3311-1

o-shige@jichi.ac.jp

## はじめに

自治医科大学は、医療に恵まれないへき地等における医療の確保向上及び地域住民の福祉の増進を図ることを目的として、昭和47年に設立され、地域医療に責任を持つ全国の都道府県が共同で設立した学校法人によって運営されている<sup>1)</sup>。創立以来、卒業生は3000人を越え、そのうち95%以上が出身都道府県の地域医療に従事し、わが国の地域医療や保健、福祉において、計り知れない貢献をしてきた。

近年、地域医療のあり方そのものが変化してきており、へき地医療だけでなく、大都市以外での医師の不足や専門医制度など、医療のあり方が問われる中で、自治医科大学の存在意義も変化してきている。そのような地域医療を取り巻く環境が変化する中で、筆者は3年前より自治医科大学小児外科に赴任し、小児外科診療および学生教育に従事している。

近年の地域医療の抱える課題を、小児外科という極めて専門性の高い領域から捉え、地域医療における小児外科の存在意義とその果たすべき役割について、私見を交えて述べさせていただく。

### 地域医療と小児医療の問題点

地域医療とは、地域の病院など医療機関での疾患の治療にととまらず、その地域で生活する住民のための生活支援活動そのものであり、地域医療の主役は地域住民である、と言われている。2000年前後から、人口の少ない市町村の自治体病院や、へき地診療所の経営困難が表面化しており、各自治体が地域医療の中心となるべき公立医療機関の赤字を支えきれなくなってきた。さらに診療報酬の改訂で、医療機関の収入が減少したことにより、この傾向に拍車がかかっている。そして最大の問題は、2004年度に始まった新臨床研修制度の施行である。研修医はマッチングシステムにより大学病院以外にも自由に研修先を選べるようになり自由度が増した。その結果、大学病院では研修医一人当たりの担当する症例数が少ない、雑用が多いなどと

の理由で大学病院は敬遠されがちとなり、大学病院の医師不足を招いた。特に多忙さと責任の重大さから、産婦人科、小児科、外科などの医師数が減少したことは周知の通りである。研修医が集まらない大学病院では医師の労働力が低下し、必然的に大学から派遣していた地方の病院から医師を引き揚げるようになった。その結果、地方病院はさらに医師不足になり、医師が都市部に集中する傾向になった。地方の中小規模の病院の医師不足、とくに産婦人科医や小児科医の不足は著しく、また近年若手外科医の不足も目立つ様になり、医師の絶対数の不足とともに、医師の偏在が大きな問題となっている。

地域の医療供給体制を維持・発展させるためには、医療機関同士の連携だけでなく、あらためて地域の住民との連携や協働の必要性が増している。有名な事例としては、「兵庫県立柏原病院の小児科を守る会」の活動<sup>2)</sup>があり、住民が中心となっていわゆる『コンビニ受診』を控えるように働きかけたところ、小児科の時間外患者が1/4になり、住民の力で地域の小児科医療を守ったことがあげられる。ここに、これからの日本の地域医療、そして小児医療の目指すひとつの道がある様に思われる。また、千葉県東金市のNPO法人「地域医療を育てる会」の取り組み<sup>3)</sup>も、地域医療は地域住民のものであり、地域住民が中心となって作り上げるべきものであることを明確に示している。これらは、地域医療の危機や小児医療の崩壊の原因を医師不足だけに求めず、住民が積極的に参加する地域医療づくりによって、自分達の医療資源の有効利用を考えるものである。

### 自治医科大学における小児外科教育

自治医科大学設立の趣旨は、「医の倫理に徹し、かつ、高度な臨床的实力を有する医師を養成することを目的とし、併せて医学の進歩と、地域住民の福祉の向上を図ることを使命とする」ことであり、初代学長の中尾喜久先生によると、建学の精神は「医療に恵まれない地域の医療を確保し、地域住民の保健・福祉の増進を図るため、医の倫理に徹し、かつ高度な臨床的实力を

有し、更に進んで地域の医療・福祉に貢献する気概ある医師を養成するとともに、併せて、医学の進歩を図りひろく人類の福祉にも貢献すること」である。つまり設立当初から地域医療を担う医師（最近で言うところの総合診療医）の養成に特化しており、旧帝国大学医学部や他の医科大学とは一線を画した医学教育および臨床実習に重点を置いた医師育成を実践してきた。

このような自治医科大学においては、医学生意識も入学時から全く異なり、彼らが自ら描く将来の医師像も地域医療で活躍する総合診療医である。もちろん彼らにも希望診療科は存在し、内科だけでなく、小児科や産科、そして少ないが外科を志す者も時に見受けられる。地域医療を担う総合医を志すなかで、小児外科学を学ぶことの意義を理解してもらう必要がある。

自治医科大学における小児外科教室は独立した講座であるが、外科学講座の中の小児外科学部門として学生教育に携わっている。よって一般外科学の系統講義の中で、小児外科学の講義を受け持っており、1コマ70分の講義を、2年生の臓器別系統講義で2コマ、3年生の臨床系統講義で1コマ、5年生の統括講義で1コマ、そして6年生の臨床講義で1コマの計5コマ(350分)のみである。この限られた時間の中で、小児外科の意義からその奥深さについて講義し、そしていかに小児外科疾患に興味を持ってもらうかに腐心している。その上、最近では医師国家試験を念頭において話をしなければならず、様々な配慮が必要である。そして、4年生の5月から臨床実習が始まり、6年生の5月まで各班8~10人が2.5日ずつローテーションしてくる。長い臨床実習の中でたった2.5日間であるので時間の制約が大きく、十分に時間を取って小児外科をアピールすることはできないが、実際に手洗いをして手術に入るように実習プログラムを組んでおり、非常に好評である。課題レポートに臨床実習の感想も記載する様になっているが、将来の地域医療での診療に少しでも役立てたいとの思いを持っている学生が多く、実践に即した診療実習を希望していることが伺い知れる。医師として診療の現場に立った際に、目の前の子ども

の(小児外科)疾患を見逃さないことの大切さを教える様にしている。どこで働くにしても、地域医療に携わる医師としての将来を考えた場合には、外科的疾患を抱えた子どもの診断や治療のみならず、術後のケアや治療終了後のフォローを地元地域で行う可能性がある。そのことを十分に認識して医学教育を受けるよう指導している。

自治医科大学では毎年、全国各都道府県より2~3名の入学者を迎え、将来は出身都道府県で地域医療に挺身する情熱を持って、豊富な医学の知識と優れた医療の技術を修得するよう努めている。ところが、2006年に発表された厚生労働省からの報告で、地域医療を担う医師を養成する自治医科大学の卒業生が、9年間の義務年限終了後に出身地(以前は「入学志願者の出身高校の所在地」であったが、数年前からは「出身高校の所在地」に加え「入学志願者の現住所の所在地」および「入学志望者の保護者の現住所の所在地」となっている)にどれだけ定着しているかを調査した結果が初めて明らかになった。これによると全国平均定着率は70.9%で、最高は新潟県の90.0%、岩手県、沖縄県、奈良県など11県が80%を超えていた。一方で、定着率が最低だったのは福島県、熊本県の50%で、東京都、佐賀県などの6都県も50%台であり、自治体による格差が大きかった。つまり、平均で自治医科大学の卒業生の3割が、最終的には地域医療に関わらない道を選んでいることになる。卒業後の義務年限中の意識の変化によるところが大きいと思われるが、全国的に地域医療に対する考え方や行政の取り組みが変化してきていることも一因だと思われる。

### 自治医科大学に併設した こども病院における小児外科診療

自治医科大学における診療のミッションは、①高度医療の推進、②地域医療連携推進による地域医療の構築、③地域医療に貢献する医療人の育成である。つまり、現在の日本の大学病院において求められる高度先進医療と自治医科大学が創立以来目指してきた地域医療の充実との両立を、いかに調和を持って成していくかが求

められている。これらの視点から小児外科診療を考えてみると、まず高度医療の推進については、論を俟つことなく、小児外科医療はその多くの部分において、高度先進医療であり、常に最先端の知識と技術を求められる。例えば、近年の新生児医療の進歩は目覚ましく、新生児外科疾患の生命学的予後は著しく改善してきた。また、小児がん診療においても、国家の政策として平成25年2月に全国15ヶ所の小児がん拠点病院が指定され診療体制の整備が行われてきた<sup>9)</sup>。実際の診療体制の整備はこれからの課題だが、地域医療だけでなく大都市周辺の医療事情に即した小児がん診療の集約化、効率化が図られようとしている。一方で、高度先進医療であり、集約化・効率化が求められている小児外科医療であるが故に、治療対象である小児に優しく、さらに患児の御家族の気持ちに寄り添う医療を常に心がけ実践していかなければならない。そのような観点から、大学病院に併設しているとちぎ子ども医療センターの存在意義は大きいと考える。つまり、安心できる質の高い小児専門医療の提供とともに、子どもと家族に明日への希望を支えることが重要である。とちぎ子ども医療センターの理念を図1に示す。

二番めの地域医療連携の推進こそ小児外科医療の最たる役割である。つまり、それぞれの地域に応じた形で集約化し効率化した小児外科医療の提供により、外科的バックアップを行うことで地域の小児医療の充実・発展が見込まれる。ある程度の地域性の中で小児科医療を完結させるためには、行政との協力関係のもと小児拠点病院的な政策の中で充実した小児外科医療の提供が不可欠であり、確固たる地域医療連携の構築が必要である。また逆に、揺るぎない地域医療連携を構築し、実績を積み重ねることで、地域医療における小児外科のアイデンティティを確立することができる。

## 文 献

1) 自治医科大学ホームページ. <http://www.jichi.ac.jp/index.html>

### とちぎ子ども医療センターの理念

自治医科大学とちぎ子ども医療センターは地域の医療機関と連携し、

1. 安心できる質の高い専門医療を提供します
2. 子どもと家族の明日への希望を支えます
3. 小児医療の人材を育成し小児医療の進歩に貢献します

図1 とちぎ子ども医療センターの理念

最後に自治医科大学がこれまで地域医療の充実・発展に大きく貢献してきた医療人の育成に関してであるが、優秀な小児外科医の育成こそが、地域医療の充実に繋がるものであると考える。小児医療を担う優れた人材を数多く育成することで、地域の小児医療の進歩に貢献する。昨今、各学会認定の専門医と総合診療医のバランスが取り沙汰されて久しいが、小児外科医こそ小児の全身を診ることができる総合力を持った専門医であると考え。

## 最 後 に

地域医療における小児外科の役割は何かと問われれば、それは地域の小児医療の充実・発展に寄与するべく、集約化・効率化した小児診療拠点病院において、優秀な小児外科医による質の高い小児外科医療を提供することであると答えたい。他の医療機関や地域の住民との密な地域医療連携を構築することで、小児外科のアイデンティティを確立することが地域の小児医療にとっても重要である。小児外科医は、小児の全身を診ることにより（外科的）疾患を的確に診断し、外科的処置や手術を含めた必要な治療を適切に行うことができる究極の専門医である。

開示すべき潜在的利益相反状態はない。

2) 県立柏原病院の小児科を守る会. <http://www.mamorussyounika.com/>

- 3) NPO 法人地域医療を考える会. <http://www.geocities.jp/haruefjmt/> [jp/stf/shingi/2r9852000002iraf-att/2r9852000002iret.pdf#search](http://www.geocities.jp/stf/shingi/2r9852000002iraf-att/2r9852000002iret.pdf#search)
- 4) 小児がん拠点病院のあり方. <http://www.mhlw.go>.

## 著者プロフィール



小野 滋 Shigeru Ono

所属・職：自治医科大学外科学講座小児外科学部門・教授

略 歴：1991年3月 京都府立医科大学医学部卒業  
 1991年6月 京都府立医科大学小児外科  
 1992年5月 京都第一赤十字病院外科  
 1993年4月 国立療養所青野原病院外科  
 1994年4月 高槻病院小児外科  
 1999年3月 京都府立医科大学大学院卒業 医学博士号取得  
 1999年7月 京都府立医科大学小児外科学教室助手  
 2002年4月 公立南丹病院小児外科医長  
 2005年4月 京都第一赤十字病院小児外科副部長  
 2007年4月 京都府立医科大学大学院小児外科学学内講師  
 2008年10月 京都府立医科大学大学院小児外科学講師  
 2012年1月 自治医科大学外科学講座小児外科学准教授  
 2014年7月 現職

専門分野：新生児外科，小児呼吸器外科，小児肝胆膵外科，小児悪性腫瘍。

- 主な業績：1. Ono S, Maeda K, Baba K, Usui Y, Tsuji Y, Kawahara I, Fukuta A, Sekine S. Balloon tracheoplasty as initial treatment for neonates with symptomatic congenital tracheal stenosis. *Pediatr Surg Int* 2014; 30: 957-960.
2. Ono S, Tsuji Y, Baba K, Usui Y, Yanagisawa S, Maeda K. A New strategy for the treatment of refractory microcystic lymphangioma. *Surg Today* 2014; 44: 1184-1187.
3. Ono S, Maeda K, Baba K, Usui Y, Tsuji Y, Yano T, Hatanaka W, Yamamoto H. The efficacy of double-balloon enteroscopy for intrahepatic bile duct stones after Roux-en-Y hepaticojejunostomy for choledochal cysts. *Pediatric Surg Int* 2013; 29: 1103-1107.
4. Maeda K, Ono S, Tazuke Y, Baba K. Long-term outcome of congenital tracheal stenosis treated by metallic airway stenting. *J Pediatr Surg* 2013; 48: 293-296.
5. Ono S, Fumino S, Iwai N. Implications of intestinal metaplasia of the gallbladder in children with pancreaticobiliary maljunction. *Pediatr Surg Int* 2011; 27: 237-240.
6. Ono S, Fumino S, Shimadera S, Iwai N. Long-term outcomes after hepaticojejunostomy for choledochal cyst: 10- to 27-year follow-up. *J Pediatr Surg* 2010; 45: 376-378.
7. Ono S, Tokiwa K, Iwai N. Cellular activity in the gallbladder of children with anomalous arrangement of the pancreaticobiliary duct. *J Pediatr Surg* 1999; 34: 962-966.